

氏名： 平野 志穂

実施国：フィリピン

調査研究

活動名称 「フィリピンにおける人々のマラリア認識および治療希求行動」

実施期間 2010 年 4 月～2011 年 3 月

(1) 計画通りに実施されましたか？運営面・経理面での変更点はありましたか？

運営面について、調査者の体調不良により一時帰国をしたため、現地パラワン州での調査許可取得および調査開始が予定より遅れ、平成 22 年 1 2 月より調査開始となりました。日本への本帰国時期も変更となり、23 年 4 月になりました。また、調査地は調査アシスタントの意欲・経験及び治安を考慮し、当初予定していたリザール県の隣である、ブルックスポイント県で行われました。

(2) 実施の結果（良かった点、反省点を含めて）

外国から来た調査者に対し、現地保健所と住民はとても友好的かつ協力的に調査へ参加してくれました。その結果マラリア対策の現状やパラワン族を取り巻く環境、伝統的知識、病気認識と治療等に関する貴重な情報を得ることが出来ました。反省点としては、全戸調査前のトレーニングを 2 日にわたって行いましたが、もう少し時間をかけて丁寧に指導した方が回答の質が上がったという点です。



村の平均的な家の造り



キーインフォーマントインタビュー

(3) 異国の参加者同士または本人が相互理解を深めたと確信できた場面は？
または実施事業に対する一般の反響は？

外国人と接する機会のない調査地パラワン族の人々は、最初は恥ずかしがった様子で積極的にコミュニケーションを取ろうとしませんでした。調査中盤から調査者にパラワン語を教え、調査者と話したいので英語をもっと学びたいと言ってくれるようになりました。調査者の帰国前には、畑から取ってきた農作物を調理し、送別会をして別れを惜しんでくれ、そのような関係が築けたことはとてもうれしかったです。これは調査者が青年海外協力隊の時に身につけた現地の人と対等に接しようとする姿勢や、積極的にコミュニケーションをとる姿勢が生きたのではないかと思います。

(4) 社会への効果（実施事業がどのように社会に活かせるか、活かしたか）

フィリピンでマラリア対策に関わる関係者からも現地の人々（プログラム受益者）の視点を取り入れた研究は少なく、貴重であると評価をいただきました。フィリピンにおいてなぜマラリアが今も局地的に流行しているのか、またなぜ対策がマラリア患者の効果的な削減につながらないのか、受益者の視点で分析し、厚生省（Department of Health）およびマラリア対策実施関係者にとってプログラム計画・実施の重要な資料となりました。また、フィリピンだけではなく少数民族の住むアジアの地域において、マラリア対策の参考資料として使用できると思います。調査結果は今後学術誌へ投稿予定です。